

三十五年 一〇七、七四八人

四十年 一一八、九三八人

四十五年 一二三、七八六人

イ 県管別府地域利水事業Ⅱ大分川取水

① 工事期間 昭和三十八年四月一日～昭和四十四年六月三十日

月三十日

② 庄内町大分川取水↓朝見浄水場へ送水、水路総延長

二〇・七キロ(地下水路八km)

③ 水源確保 最大日量九万トンⅡ十三万五千人(一日

一人六六〇リットル)

ウ 扇状地中央部総市街化など可能

南立石・朝日・鶴見・大平山・緑丘各地区等市街化

## ロ、八幡朝見神社

### 1 草創

建久七年(一一九六)、豊後初代守護職大友能直が鎌

倉「鶴岡八幡宮」のご分霊を、龍ヶ岡(現乙原(現上

原「一の出」)に勧請したことに始まるという。

### 2 社殿の変遷

ア 正平三年(一二三四)Ⅱ南北朝時代の南朝年号、鶴見

山噴火により、社地崩壊し現在地に遷座。

イ 慶長三年(一五九八)Ⅱ豊臣秀吉没、震災発生、本社

殿罹災し什宝・旧記など壊滅。

ウ 寛文十年(一六七〇)Ⅱ江戸幕府四代將軍家綱時代、

社殿・拜殿・神楽殿の再興。

### 3 祭神

菅田別命ほむだわけのみことⅡ応神天皇おきながたらしひめのみこと・氣長足姫命Ⅱ神功皇后な

ど四神を祀る。

### 4 主な宝物

ア 源頼朝が大友能直に与えたという口伝のある甲

イ 楠木正成の所持品といわれる蓑股古鏝

ウ 石垣原合戦で吉弘統幸が所持したと、後藤碩田奥書の

ある小旗

エ 嘉永二年(一八四九)、後藤碩田が写図した石垣原古

戦場の図

オ 文化十年(一一八三)、町人らが寄進した神鏡

カ 中世文書・近世文書多数

### 5 参道と境内の文化財など

ア 表参道二の鳥居までの敷石に、「十二支」の彫像が刻

まれている。

イ 表参道階段敷石の中に、「ひょうたん石」「さかずき石」などがある。

ウ 参道の階段の上に杉の巨木「夫婦杉」がある。二人で通ると結ばれるという。

エ 神社林は、特別保護樹林・市生物環境保護地区に指定されている。

オ 県天然記念物に指定の「大楠木」は樹齢一千年を越え神社のご神木である。

カ 神社の社殿右手玉垣の元に、名水が湧き出て御神水となっている。江戸時代天明の大飢饉の際、ここだけ清水が湧き続け、人々を救ったことに由来する。「萬太郎清水」とも云うが、親孝行息子の善行に由来する。「八幡朝見神社の歴史と文化」

（発行者 神 日出男）より

## 八、萬年山長松寺

1 宗派 曹洞宗・永平寺派

※参考 禅宗↓鎌倉時代に開宗、武士階級の帰依を背

景に鎌倉時代以降普及

① 臨済宗 開祖Ⅱ栄西、入宋（一一八七〜九二）

幕府の保護・鎌倉時代に北条政子が鎌倉寿福寺、二代將軍源頼家が京都

建仁寺建立・室町幕府三代將軍足利義満は五山・十刹の制で寺格を定め

た。京都五山・鎌倉五山  
※座禅 公案（禅問答）、師の出す問いを通して悟りに至る

② 曹洞宗 開祖Ⅱ道元、入宋（一二三三〜二七）

冥利忌避↓越前大仏寺に移り、永平寺とする。地方の中小武士・農民の帰依

※黙照禅 只管打坐、ただひたすら座禅を組むことで、悟りに至る

2 本尊 釋迦牟尼佛

3 由緒（寺伝による）

ア 用明天皇治世（五八六）百濟僧豊国法師創建↓仁聞菩薩中興「寶籠山阿弥陀寺」と号す

※仁聞菩薩 下毛・宇佐・国東・速見の寺院開基とされる伝説上の人物

イ 神龜三年（七二六・聖武天皇）詔して水田山林賜う↓

鎮西の道場となす

ウ 貞観九年（八六七）震災伽藍悉く倒壊して跡を留めず

※貞観九年一月には鶴見岳大噴火の記録あり（『日

本三代実録』巻十四）

エ 後朱雀天皇時（一〇三六～四五年在位・平安中期）淨

藏貴所之を再興↓無量山朱雀院と号す

オ 久寿二年（一一五五）氣備山崩壊、殿宇悉く地中に埋

没

カ 鎮西八郎為朝再興、山号を田島と改める↓後戦火で焼

失

キ 慶長・寛永の間（江戸時代初期）

智門泰傳和尚「田島萬年山朱雀長松禪寺」と改称し、

永平寺八世玉田妙高和尚を迎え、開山第一祖と為す

※慶長（一五九六～一六一五）寛永（一六二四～

一六四四）

以上（キ）まで『別府市誌』昭和八年版・第二章・

第一九節「長松寺」より

ク 往昔「田島山朱雀院」と号す。この寺既に廃絶して幾

星霜を経、唯茅堂のみありて、無量壽佛の古像一體を

安置せり。（中略）元和貳年（一六一六）（中略）再興

し、萬年山長松寺と命名、国東泉福寺第一三世玉田禪師を迎え開祖とする。

『別府市誌』昭和八年版・第十二章社寺教会・第二

節寺院より

4 ドルメン（境内に埋没）

※巨石記念物 三、四個の巨石で側面を囲み、上部

に扁平な一個の巨石を乗せたもの。

墳墓とされている。各地にある。

『別府市誌』昭和八年版・第二章上代遺跡・第二節

先史時代・第二長松寺境内のドルメン



配水池にて

# 朝見浄水場（詳報）

外山健一

明治三十八年八月、別府町長日名子太郎が「上水道敷設工事企画」を町会議に諮問し同意を得る。明治三十九年四月一日、別府町・浜脇町対等合併、別府町初代町長に日名子太郎が就任（明治三十九年七月十日）するや、合併前の「上水道敷設工事企画」を推し進める。同年八月、町議員八人を水道調査委員に任命し先進地（東京・熱海・大阪・神戸・岡山・下関）の視察を行う。

第二代町長吉田嘉一郎の下、設計が行われた。大阪市水道局の工学博士小林泰蔵を工事顧問に、大阪市水道局技師大塚藤十郎を工事部長として採用、さらに大阪市水道局技師大塚藤十郎を採用手石崎貞二郎を採用し、近代的な浄水場諸施設的设计を行った。



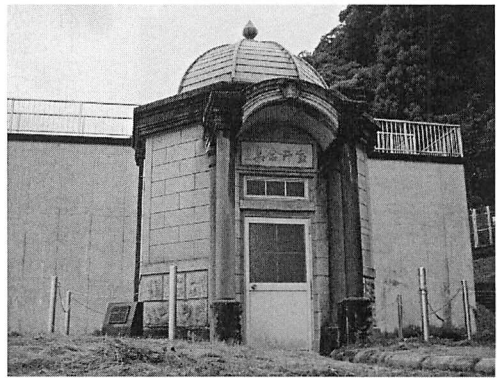
量水室

大正二年七月十一日事業認可を得る。

第三代別府町長磯沖菊蔵によって、大正三年七月二十六日朝見浄水場起工、大正六年三月三十一日完成（総事業費三六二、一四〇円）。同六年四月一日供用開始。全国で三十七番目の快挙であった。

施設内容は乙原貯水ダムを水源として濾過池三箇所、配水池二箇所、一日の給水量二、八〇〇トン（小学校用プール十一杯分）、給水人口二五、〇〇〇人であった。当時旅館が約三百軒あったが、一般家庭は井戸水を使用していたことから、お金を出してまでして水を買う事に抵抗があり、当初事業運営は苦しかった。

大正六年に造られた「集合井室」、「配水池」（レンガ積）、「配水池北入口」、「配水池南入口」、「量水室」Ⅱ（朝見神社駐車場入口）の五施設は近代化遺産として、平成九年「国登録有



集合井室

形文化財」となった。

「量水室」はギリシャ風の神殿を偲ばせる鉄筋コンクリート造りの建物でコリント式の円柱をもち、正面に量水室と刻まれ、また別府町水道事務所のマークが掲げられている。

朝見浄水場内の「集合井室」は鉄筋コンクリート造人造石仕上げで、ドーム状の屋根をもつクラシックスタイルである。

建造物はいずれもデイトイルズ（細部）に大正ロマンを感じさせるデザインがほどこされている。

その後、人口増加に併せ、拡張工事を繰り返し実施したが、現在のような状態になったのは、昭和四十二年に実施された第六期拡張事業である。

戦後から昭和四十年頃までは、別府市は慢性的な水不足の状態であった。これを解消する事が市政の急務であり、大分川からの取水を模索していた。その頃新産都指定と国体開催を見据えて、大分県企業局による別府発電所設置計画案が浮上した。これに便乗、発電所の余り水を朝見浄水場に取水する事となり、昭和四十二年に第六期拡張事業として完成した。大分川から約二十一キロメートルの距離を、水路とトンネルで別府朝見まで水を引くという大事業である。

大分川沿いの久大線湯の平駅の大分寄りから元治(げんじ)

水路（一八六四年）井路を利用するもので大分川取水口から小狭間川取水口まで一二、八四四メートルを水路、これより別府発電所までの七、九二一メートルをトンネルで送水するものである。総延長は二〇、七六五メートルである。なお別府発電所手前の配管の直径一・三メートル、管末は一メートルで発電力は一、五〇〇KWである。

この発電の余り水約五〇、〇〇〇トン朝見浄水場に取り入れ、別府市全体七六、六八〇トンのうち約七五パーセントの五一、八四〇トンを浄水して家庭に配水している。この事業にかかる別府市の負担金は約十九億円であった。

現在、別府市全体で十八水源（大分川取水・乙原貯水ダム・鮎返ダム・地下水など）を有し安定供給を維持している。

（参考）鮎返ダムは、終戦後、占領軍用に築造したダムで、占領軍撤退後、国から無償で払い下げされた。



配水池

## (二) 市外―筑豊地区(田川市石炭・歴史博物館、嘉穂劇場)

本年度の市外史跡探訪地は、別府観光や別荘の建築などで関係の深かった筑豊地区を候補地とした。八月四日の土曜日に三重野・恒松両副会長と松岡事務局長の三名が、コースの所要時間や見学地などを検討しながら探訪した。その結果、「田川市石炭・歴史博物館」及び「嘉穂劇場」の二施設に時間をかけて見学・学習することが、筑豊地区の歴史と別府の関係の理解が進むと考え、他の施設例えば、旧伊藤電衛門邸や直方歳時館(炭鉱主堀三太郎旧宅)などの邸宅跡等は割愛することにした。また、田川市で各自での昼食は難しいと考え、四十五人程度が昼食できる場所を紹介してもらい試食した。二つの施設と昼食の予約をして、帰路に着いた。

十一月十一日(日)の行程を振り返ってみたい。別府駅西口ロータリー上での路上受け付けは雨が降っていたため困難で、乗り込んだバスの中で行なった。募集人員四十五名に対しほぼ定員の四十三名の参加人員を確認し八時前に出発した。

会長挨拶、日程説明などの中、高速道路別府インターから田川市を目指した。トイレ休憩の道「しんよしとみ」に

着いたときには、雨も上がり、その後の史跡探訪は傘もいらずに行動できた。会長から筑豊地方についての歴史説明が往復のバスの中で行われ、史跡探訪の意義を深めた。また、矢島研修担当理事から、車中より見えるコース途中の各史跡の説明が行われ、見学の理解が進んだ。この地は矢島理事が少年期数年間疎開で過ごした地であるとのことであった。この地の歴史とその説明概要をまとめていただいていますので、掲載します。

最初の見学地「田川市石炭・歴史博物館」では、史談会の予約とすることで一番ベテランのボランティアガイドが説明に付いて下さった。入館前に石炭公園から見える周辺の説明などと炭鉱の歴史を、炭坑節などの唄も交えての概要説明を受けて、記念撮影をして



田川市石炭公園にて

入館した。

館内では、まず一階展示室で筑豊炭田解説映像「石炭」(100年の嵐)を視聴し、三井田川伊田坑模型で説明を受け、屋外展示場へと移動した。坑道掘進機や蒸気機関車・大煙突・竪坑槽等の説明を受け、復元炭鉱住宅の見学をした。内部は明治・大正・昭和期の炭住の間取りを再現しており、少しずつ改善されてはいるが基本的には長屋住まいであることが知られる。館内に戻り、二階第二展示室に移動、ユネスコ世界記憶遺産「山本作兵衛コレクション」の実物展示を見学した。室内は直射日光を遮断し照明も工夫し、変質を防御していた。(実物展示は期間が決まっているとのことであった。幸運)

内容は胸を打つ作品ばかりで、多くの人が感銘を受けていた。第三展示室は、田川地方の歴史と民俗をテーマにした、郷土の歴史資料を展示している。見学が終わり、予定通り昼食場所に向かった。

昼食場所「相撲茶屋・貴ノ花」は九州場所での貴乃花部屋の宿



相撲茶屋・貴ノ花

舎にもなっており、この日から始まった場所の取組の無い弟子が茶屋裏の宿舎や稽古土俵に数人いた。昼食の済んだ多くの人が土俵見物をした。

次の見学場所「嘉穂劇場」では、我々はこの日の第七番目の入場団体とすることであり、出る時には九番目の団体が入場していた。



嘉穂劇場

多くの見学があることが知られる。

まず、舞台の上から客席を眺めながら全体の概要説明を受けた。次いで順路にしたがい小道具部屋、舞台綱元、奈落、花道下などを通り客席に上がり桝席・花道・小花道を経て二階に上がり、資料展示室などを見て見学を終えた。千二百人収容の客席を持つ大劇場を見て、かつての繁栄ぶりが偲ばれた。

帰路のバスの中で、会員の宮崎雅美さんの炭鉱や炭鉱夫の様子を描いた「のそん弁当」の紙芝居を見て、石炭博物館で学習した炭鉱の状況を思い出した。その紙芝居を縮小し単色

ではあるが、掲載します。また、当日配布の資料を掲載しますので、事後学習の参考にして下さい。

### 史跡探訪レポート資料（筑豊地区）

#### 田川市石炭・歴史博物館

1 石炭産業の歴史を後世に伝えるために開館。

#### ア 資料館の開設

① 昭和五十八年（一九八三）「田川市石炭資料館」として開館。

② 平成十七年（二〇〇五）一〇月博物館法に基づく登録博物館として、名称を「田川市石炭・歴史博物館」と改称。「石炭」を名前に冠した博物館は公立では全国唯一。

#### イ 展示内容

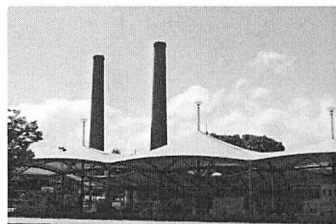
① 第一展示室は、石炭採掘の様子や運搬、利用などの炭鉱の歴史が学習できる。

② 第二展示室は、炭鉱の文化や文学作品などを紹介。当館は、山本作兵衛コレクション（ユネスコ世界記録遺産）六九七点のうち炭鉱記録画・日記等六二七点を収蔵している。

展示室にその一部を公開している。

③ 第三展示室は、田川地区で発掘された遺跡の出土品や伊加利人形芝居などの歴史・民俗資料を展示し、田川地方の歴史が学べる。

④ 屋外展示場には、産業ふれあい館（明治・大正・昭和期の炭住間取りなどの復元炭鉱住宅）や蒸気機関車、坑道掘進機などを展示。博物館は「石炭記念公園」内にあり、公園には国登録文化財の「旧三井田川鉱業所伊田堅坑」の「櫓」や「第一・第二煙突」が残されている。



第一・第二煙突

#### 2 筑豊炭田の歴史

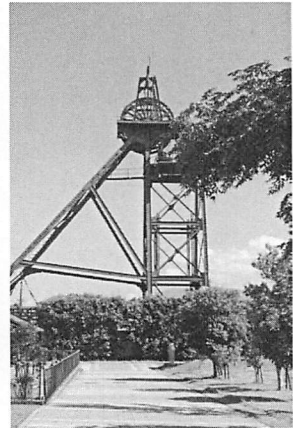
#### ア 石炭の採掘

① 江戸時代前期に開発された小炭田が始まりで、藩専売品・国産品（藩特産品）・統制品では、筑前福岡藩（黒田家）は塩・紙・蠟・石炭で、豊前小倉藩（小笠原家）は蠟と石炭であった。

② 幕末・開港期には、船舶用・輸出用であった石炭は、



一八九〇年  
代の蒸気機  
関を使用す  
る近代工業  
化が進み、  
財閥系資本  
の進出と地場企業家の出現で生産量を飛躍的  
に伸ばした。



堅杭槽

## イ 大規模開発の歴史

- ① 明治二十三年（一八九〇）筑豊炭田一帯で排水用蒸気ポンプを導入し採炭が効率的になった。
- ② 明治三十四年（一九〇一）官営八幡製鉄所がドイツの技術をもとに、清国の大冶鉄山の鉄鋼石と筑豊炭田の石炭を使用し操業を開始した。この頃には、三井・三菱・古河・住友などの財閥系鉱業所が進出し採炭して、国内生産量の過半数を占める産炭地となった。
- ウ 傾斜生産方式（石炭・鉄鋼生産中心）による復興
- ① 昭和二十一年（一九四六）十二月、石炭・鉄鋼の増産により経済の活性化を促す政策がとられることに

なり、翌一月復興金融金庫を設置し石炭・鉄鋼・電力など基幹産業に資金投入。

## エ エネルギー革命による衰退

- ① 一九五〇年代、中東からの安い原油供給によって石炭によるエネルギー供給が激減した。
- ② 一九七〇年には石炭エネルギーは二割を切り、石油が七割を超えた。（他は水力・ガス等）

## 嘉穂劇場

### 1 炭鉱労働者の娯楽場

#### ア 筑豊炭田で働く労働者の娯楽場として開場

- ① 中座として開場 大正十年（一九二一）株式会社中座設立、翌年開場。昭和三年（一九二八）全焼、翌年再建・新築落成。昭和五（一九三〇）年台風により倒壊、株式会社中座解散。

※この頃、社会運動・労働争議が盛んとなり、無産政党や労働組合などの各団体が結成された。

- ② 嘉穂劇場発足 昭和六年（一九三一）落成。

※この年満州事変が起こり、十五年にわたる戦時体制に入る。石炭は重要産業。

③ 昭和十一年（一九三六）筑豊二市四郡劇場組合結成。

三十三劇場が加盟。

※炭鉱が栄え、娯楽場として芝居小屋が多く建設されていたことが知られる。

## イ 戦後の歩み

① 昭和四十二年（一九六七）飯塚文化センター完成。

その後、仲店・楽屋の改築や各設備の設置などを行い、さらに改修・新設を行った。

② 平成十四年（二〇〇二）登録有形文化財に登録（飯塚市）されたが、翌平成十五年七月の大水害で壊滅的被害を受けた。

※筑豊地方の交通網の整備

鉄道網の完成 明治二十四年より四十四年にかけて、若松・

直方開通、飯塚・碓井開通、大隈、上山田・天道・長尾（桂

川）、山野・貨車まで延伸、田川線（川崎・添田延伸）、伊

田線（直方・金田・伊田を複線化）と日進月歩、枝を伸ば

した。その結果、遠賀川及び支流の石炭運搬船（川罫Ⅱか

わひらた、五平太船ともいう）は姿を消し、船頭は炭鉱員

になることを余儀なくされた。

山本作兵衛の父・福太郎もそのような一人であった。

③ 平成十六年（二〇〇四）NPO法人を設立し復旧工

事に着手し九月に竣工。平成の「こけらおとし」と

して「全国座長大会」を開催し復興した。

④ 平成十八年（二〇〇六）国指定の登録有形文化財に

登録され、翌平成十九年には経済産業省の近代化産

業遺産に認定された。なお、石炭採掘関連設備など

も登録されている。

## 2 劇場の構造

### ア 間口十間、柱がない空間

① トラス（短い基本ユニットを次々に結合して形成す

る構造物）形式の小屋組みで任意の形態形成が可

能であり、約十八メートルの梁を構成することで、

千二百人収容の客席を持つ空間が生まれている。

## イ 江戸時代の芝居小屋形式

① 桝席構成の客席による観劇、二本の花道、人力で動

かす廻り舞台などの形式。